



新ローマ教皇・誕生

二人の教皇との謁見



ローマ法王初の南米出身

【朝日新聞】ローマ法王庁(バチカン)は13日、夜(日本時間14日未明)、ベネディクト16世の退位に伴う法王選出会議を、266代目の新法王に選んだ。ローマ法王(ベネディクト)アルゼンチン

13、14の両日、豆市で打たれた戦七番勝負(読者の第6局)に1977年中押し勝ちし、シリーズの勝利井山は大阪府でプロ棋士となり9年に七大タイ最年少となる

世界各地に約十一億人の信者を抱えるローマ・カトリック教会の

新教皇の誕生を伝える新聞の紙面(朝日新聞から)

頂点に立つローマ教皇。第二百六十五代教皇、ベネ

ディクト十六世が高齢を理由に突然退位した。新教皇を選ぶためのコンクラーベ(教皇選挙)で初の南米大陸出身、アルゼンチンのベルゴリオ枢機卿が選ばれ「フランシスコ」と名乗る。

「フランシスコ」はイタリアの聖人、アシジのフランシスコからとられたもので、映画「ブラザー・サン・スター・ムーン」で日本でも知られた聖人だ。自らの富を捨て、

貧しい人々のために尽くした聖人の名前を選んだという事は、新教皇が貧しい人々のために働くという意志を示さる。また、日本にキリスト教を伝えたフランシスコ・サビエルと同じイエズス会員

という事とも何となく親しみが持てる。ローマ・カトリック教会はこの教皇を頂点とする枢機卿、司教、司祭という位階(いか

い)制度からなる。組織は人間にとって必要悪のような存在かもしれないが、カトリックの信徒として教会が余りに聖職者中心主義であるのではないかと

思う。このため信徒の自発性や自立した信仰に欠けているように思える。

とはいえ、位階制度の中心をなす教皇の初代はイエス・キリストの直弟子のペテロであり、以来、二千年間、カトリック信仰が守り

続けられてきているのは、この位階制度によることも事実である。「神は死んだ」と表現される現代社会で、現代人に信仰心をどう育むかは新教皇の大きな課題だろう。

ところで、私は幸運にも二人の教皇と謁見している。一人はパウロ二世、広島教区創立五十周年(今年は九十年に当たる)記念事業の企画立案を依頼さ

れた時、論文コンテスト(テーマ・社会に福音を)を実施し、最優秀にはヨーロッパ・聖地十六日間の旅をプレゼントした。また同時に旅行団員を募集した。

私も団員としてその旅に参加したが、バチカンでの教皇謁見の際、団長の神父とともに最前列でパウロ二世と握手をした。(詳しくはこの「巡礼の道」のホームページの第六十八話「巡礼のハイライト」に掲載)HPはふじやかんで検索)

もう一人はヨハネ・パウロ二世。来日された時、ちょうど山口・島根地区の役員をしていたので、信徒を代表して東京で謁見した。妻と幼稚園児だった長男も同行を許可され、謁見の際、子供は長男唯一人だったので教皇は長男を高く抱き上げられた。

長男は特別の恵みを受け、司祭にでもなるかと思ったら、中学校の教師となり、今は教会にも行っていない。世の中はままならぬものだ。幼児洗礼を受けさせたが、大人になっても信仰は本人の問題であり、いつの日か父母の姿を思い起こし、教会に行くようになればうれしいが、強制するようなものではない。

来日され、大地に接吻する

ヨハネ・パウロ二世



二人の教皇に謁見できたことも恵みとは思いますが、だからといって特別の力が与えられたわけではない。要は本人の自覚であり、それを恵みとして生かせるかどうかは自分の信仰心次第だ。残された人生をどう生きるか、神にすべてを託して生きたいという心が最近強くなったのは事実である。